

【用語】懇書―懇切な書状 安着―無事に到着すること 安意大慶―安心し、めでたいこと 満悦―満足して喜ぶこと 故障―差し支え安堵―安心すること 冬照―守部の息子 おさと―秋主の妻 おいと―秋主の長女、元次郎の姉 寒威―厳しい寒さ 専一―第一、随一 頓首―手紙文などの末尾に書いて敬意を表わす語

【解説】伊勢国(三重県)出身の橘守部たちばなもりべ(天明元く嘉永二年)は独学で国学を修め、本居宣長の学説を批判し、神話の解釈や古典の研究に独自の説をうちたてた国学者である。吉田秋主あきぬし(寛政六く安政四年)は守部の門弟であり、最大の後援者でもあった。機業家の秋主は地元桐生新町で国学・歌学を学んでいたが、武蔵国葛飾郡(埼玉県幸手市)に住んでいた橘守部を知って入門し、以来、歌学・古学の教えを受けた。秋主は守部の学識を尊敬し、文政年間末頃には桐生新町に招待している。これは元来盛んであった桐生の国学を一層発展させる契機となった。また、秋主は守部の著書刊行を積極的に援助しており、守部の業績の多くは秋主の経済的支援によって可能になったともいえる。

天保二年(一八三一)秋主ら桐生・足利の門人らの援助で、守部は江戸浅草の浅草寺境内の庵に転居した。この庵に秋主の娘いとと息子の元次郎が遊学・滞在することになり、元次郎の遊学は天保十四年十一月から始まった。この書状によると、十月末、秋主は元次郎を遊学させるため守部を訪問したのち、十一月一日に門出の祝をして出立させた。そして四日、元次郎は無事に守部の元に到着した。守部は息子の冬照への贈り物の礼を述べたあと、元次郎を次男のつもりで世話すると記しており、家族のように迎えられたことがわかる。